

道具についての懷疑

——オックスフォード哲学協会での講演 1903年11月8日——

H. G. ウェルズ著 小澤正人訳

今夜皆さんの興味を引き出すのに一番うまくいきそうなのは、私が物事を考える時に使用しているある特別な形而上学的、哲学的体系をごく簡単に説明することではないかと思います。もっと詳しく言えば、現在受入れられている哲学から最も大きく異なっていると私が考える1、2の点について説明して、皆さんに検討していただくということです。

無作法に見えそうなこと、気に食わないかもしれないアクセントや方言の多少の違いがあるかもしれませんが、あらかじめ承知しておいてください。また、不器用な説明と思えるようなことを聞く覚悟もしておいてください。とっくの昔に見事に考えつくされ、語られていることを、私は無知故に再発見し、それを説明しているのですから。ですが、最後になれば、最初は腹の立ったことの幾分かは許してやろうという気になっていただけるかもしれません。……¹⁾こうした私の知的基盤を説明する時に、少しの間自伝的な方向に落ち込んでしまうのは全く避けようのないことです。

さまざまな事情が組み合わさって、私は、何らかの哲学的な考察をするようになる以前に、具体的な事物についての知識をきわめて広範囲に広げていました。未開人や動物は精神的には純粹に客観的な存在だという話を聞いたことがあります、その点では私は20歳をかなり超えるまで未開人や動物のようでした²⁾。自分という存在の中にある主観的な、あるいは内省的な要素には全く気が付かなかったのです。それとは知らずに〈実証主義者〉になっていたのです³⁾。小さな頃の教育はお粗末なものでした。自分個人での観察と探究、実験のほうが、何らかの指導よりもずっと重要となるものでした。あるいは、たぶ

ん私が受けた指導は自分1人で学んだことと比べてさえ少ないものだったでしょうし、それも13歳で終わったのです⁴⁾。人生のより困難な現実と直面して、実に詳しく分かるようになるまで行きました。様々な形の飢えを知り、生活に不可欠な多くのものを手に入れるために卑しく、不愉快なことをしなければならない生活でした。それが15歳になるまで続きました。その年齢の頃、一種の神学的で愚弁的な好奇心の指示に従って、意図的に、また正確に〈基礎科学〉と呼ぼうと思うもの——キャッセルの『ポピュラー・エデュケーター』⁵⁾や廉価版の教科書などから得たもの——を学び始めました。それから今日の私たちにはほとんど重要性を持たない偶然や野心によって、私は3年間の啓発的で実に科学的な学習をするようになりました。この3年間で中心となる事実は、エジプシオン・ロードにあった学校でのハックスリー教授による〈比較解剖学〉の授業でした⁶⁾。これを核として、広範囲にわたる諸事実の要約をまとめていきました。この時期の終わりには、表面的には現実と思われる宇宙についての、かなり明晰で、完全で、秩序だっている見解だと私が今でも考えているものを獲得していました。私が見つけた主要な事柄を説明させてください。私は、人間を空間と時間の大きいなる体系の中に明確に位置づけました。私は、後になって変えられないほどに、人間がどんなものであるか、正体を知ったのです。有限であり、最終的なものではなく、妥協と適応からなっている存在だと。例えば、人間の肺の由来を辿りました。魚の浮袋から、一步一步、解剖用メスと探り針を使って、十種類以上の型を調べました。また、祖先にあった盲腸が縮小し、現在の、病気の原因となる盲腸になったのも見ましたし、鰓裂が徐々に集まり耳の役を果たすようになる様子や、爬虫類の顎関節支持組織が感覚組織の必要性を補うために本来あったところから取られて利用される様子を観察しました。あの驚くほどに満足のない、不完全な道具の発達の問題を解き明かしました。人間の歯のことで、鯊の大鱗から生じて、金の詰め物の土台となる現在の機能にまで発達したのです。また、人間がこの世に生まれてくる妊娠の複雑で苦しい過程がゆっくりと進展していくのを辿りました。私は、こうしたことすべて、また同様の多くのことを解剖により発生学で辿りました——私は1年間の古生物の授業でもう一度発達の全理論を確認し

ました。宇宙物理学の授業で、その全過程の規模を星々の尺度で測りました。そして、客観的な説明すべてが訪れた後で初めて、私は何らかの哲学的な、あるいは形而上的な探究の第一歩に到達しました。なぜ私は信じるのか、どのように信じるのか、何を信じるのか、あるいは基本的な物質とは何なのかなどに関する探究です。

さて、知識を求めるこの幕間劇のすぐ後にやってきたのは、教育に没頭しなければならない期間でした。そして、非常に多くの人々から、また愚かにも、見下されている〈教員免許状〉の一つを取得するのが賢明なことになってきました。この企てを通して、私は教育方法、教育理論、論理、心理学について表面的ではありましたが示唆に富む勉強に進むことになり、最後に、学位に関する細かなことが片付いたときに、哲学に向かいました。ところで、比較解剖学を支える高地を支配している論理に到達するという事は、多くの極めて当然とされている先入観を精神から吹き飛ばしてしまった論理に到達するという事です。それは、論理の側面を衝くということではないかと私は考えます。次のようなことを骨の髄まで理解した時、つまり、人間のすべての肉体器官と肉体構造は一連の適応と接近を経ていまのようになったということ、それは死による排除を通してのみ実際の効率のレベルに維持されているということ、そして、このことは頭脳や本能、精神的傾向についても同じであるということを理解した時、人間の思考の道具が疑いようもなく神秘的に異なるものであり、優れているものなどとは考えたりしなくなるでしょう。そして、論理学をほんの少し学んでいただけでしたが、すぐに私は、自分が同意できない含意と、また、頭の中に作り上げられていた客観的事実の一般的体系とまったく一致しないように思われる仮説とに気付くようになりました。

私は論理的過程と言語とがあるかなり暫定的な性格を共有しているのではないかと予想して両者の考察を始めました。人間の肉体的、動物的な存在すべてに浸透している不規則な限界と適応という性格です。そして、私は予想していたものを見つけました。その結果として、論理学の仮説に関わる一種の知的な頑固さを発見しました。それははじめ私を困惑させ、次いで私の精神の中に隠れていた懐疑主義をすべて目覚めさせたのです。

私はずっと以前に、一般に認められている論理への最初の異議を1891年7月の『フォートナイトリー・レビュー』誌に掲載された短い論文で説明しました⁷⁾。「唯一性の再発見 Rediscovery of the Unique」という題名でしたが、読み直してみると、書き方の点でまったくひどい、いらいらさせるものであるだけでなく——それはずっとわかっていたことでしたが——表現においてもどうしようもなくひどいものだとすることに気づきました。書き方と表現の使い方での私の表現能力が著しく向上したかどうかについては疑うに足る十分な理由はありませんが、とにかく、今は以前のこの失敗に全力で取り組んでみましょう。

もはや些細なこととはみなすことのできない見落としは他にもありますが、とりわけこの不幸な論文はある事実を完全に無視していました。一対多の対立、特定の観念と個人の現実との対立に関する研究文献はすべてが既に存在しているという事実です。あの論文は他の思想や思想家たちとの関係を明確に示してはいませんでした。今なら、私が当時何を理解していなかったのか、何故完全に無視されてしまったのかが分かります。しかし、私は、その論文の根底にあった考えに今でもしがみついています。私はそれが最終的には人間の思想にとって最も重要なもののひとつだとみなされるであろう観念だと考え、昔のその論文の内容を、私の一般的事例についての最良の始め方として、もう一度ごく簡単に述べてみたいと思います。私の最初の懐疑は、本質的には**分類の客観的実在**についての疑念です。これは私の哲学の第一番目の、主要な命題であると躊躇なく申し上げておきましょう。

私が考えているのは、分類とは精神的道具の作用の必要条件であるが、それは事物の客観的真實からの逸脱であり、また分類は人生の実際的な目的には役に立つのだが、哲学的な目的がより傲慢な気分の時に要求する微妙な洞察のためには大変に疑わしい準備方法であるということです。私特有の特別な考え方はすべてここから派生しています。

当然のことですが、解剖学研究によって育てられた精神には、生物学上の種^シの曖昧さと不安定性に関する示唆が満ち溢れています。一つの生物学上の種は、唯一の個体が途方もなくたくさん集まったものであることは非常に明白ですが、その種を他の生物学的種と区別することが可能なのは、種と種の間をつ

なく莫大な数の個体が時間的に互いに接近できない——言い換えれば、すでに死んで存在していない——という事実によっているだけなのです。そして、その種の新しい個体各々は、それ自体の個性性という弁別的特質において、その種のそれ以前の平均的属性から、たとえどれほど微細な程度にせよ、確かに分離しているのです。種の属性のどのようなものであっても、たとえ特別な定義による属性でさえ、多いか少ないかの問題でないようなものは存在しません。例えば、もしある種が背中に大きな赤い斑点が一つあるという点で区別されているとしても、非常に多くの標本を調べれば、あるところでは赤い斑点は見えないほど小さくなっていて、別のところでは全体が赤くなるほど広がっていたり、色が薄くなってピンク色になっていたり、濃くなって赤褐色や茶色になっていたり、真紅に変わっていたり等だということを発見するでしょう。これは生物学的種にのみあてはまることではありません。ある一つの鉱物種を作っている鉱物標本についてもあてはまります。ジャッド教授の岩石分類に関する講義でいつも繰り返されていた言葉を思い出します⁸⁾。「これらは見分けがつかないほど少しずつ変化しながらお互いへと移っていく。」これはすべてについて言えることだと私は考えています。

皆さんは、多分、同一のように類似したものの例として、物質の原子を思いつくかもしれませんが、それは経験的なものではなく、理論上のものですし、化学における現象はどんなものでもある仮説に基づいて同じようにうまく説明できます。その仮説とは、どんな実験においても必然的に含まれている莫大な量の原子こそが、平均の法則の作用によって、個々の原子も唯一^{ユニーク}的な性格、つまり特別な個々の相違点を持っているという事実を隠しているに過ぎないという考えです。すべての個体の持つこの唯一^{ユニークネス}性という観念は物質科学の分野についてだけあてはまるものではありません。通常の思考における種についてもあてはまるし、むしろより一層明白にあてはまるものであり、通常用語についてもあてはまるものです。**椅子**という単語を取り上げてみましょう。ひとが椅子と言う時には、漠然と平均的な椅子を考えています。しかし、個別的な事例を集めていろいろ挙げてみてください。肘掛け椅子や読書用椅子、ダイニングルームの椅子、台所用椅子、ベンチに変化した椅子、境界線を越えてセティー

になった椅子、歯科医の椅子、王座、オペラ・ストール、あらゆる種類の座席、〈アーツ・アンド・クラフツ美術工芸展示会〉の床を占める不思議なキノコのような製作物などで⁹⁾。そうすると、この単純で直接的な言葉が実際にはどれほどゆるい束であるか確認できるでしょう。私が知的な指物師と共同作業をすれば、皆さんが挙げるどのような椅子の定義でも、つまりどんな椅子らしさの定義でも打ち負かして御覧に入れましょう。椅子は、個々の有機体とまったく同じ位に、鉋物や岩石の標本とまったく同じ位に、唯一的なものです——もし皆さんがその椅子を十分によく知っていれば、機械が作った一揃いの椅子にさえも一つ一つの違いを見つけ出せるでしょう——そして、私たちが無限の能力を持っていないから、私たちの頭脳が客観的な唯一物からなる無限の宇宙と対応しきれない限られた数の分類用仕切り棚しか持っていないからというただそれだけで、私たちは惑わされてしまい、この種の中にはすべての椅子に共通し、他のものと区別することのできる椅子らしさがあるという信念を持ってしまったのです。

繰り返させてください。このことは、人生の実際的な諸問題においては、あるいは、はっきり言って哲学と広い一般化以外のものとの関係においては、まったくとるに足らないことです。けれど、哲学においては実に重要な問題なのです。もし私が朝食に産みだす卵を2個注文したら、まだ孵化はしていないけれど、それでも唯一のものである鳥類の個体が出てくるでしょうし、多分、私の野蛮な生理学的目的には役に立つでしょう。この種類のものとはあまり近くない過去の雌鶏の卵や、世代ごとに過去を蓄積していく未来の雌鶏の卵は無視しても構わないでしょう。化学的組成の異常とか、私の生理学的反応の驚くべき変異といったごくまれな可能性は思い切って無視することができるでしょう。ほとんど完全にと言えるほどの自信を持って、無制限の単純さで、「2個の卵」と言うことができますが、もし私の関心が、朝食ではなく、これ以上ないであろうと思われる真実であるならば、そのように言うことはできません。

さて、さらに進んで、この唯一性という考えがどこへ向かうのか説明させてください。私は、演繹法は分類に基づいているのではないかと、そしてすべての厳格な論理的推論は分類の客観的実在の確信を含意する傾向があり、また含意

しがちなのではないかと考えています。その結果、このことを否定する場合には、私は論理の絶対的な妥当性を否定していることになります。分類と数は本当は客観的実在の微妙な相違を無視しているのですが、過去の人間の思考においては事物の上に押し付けられていました。はっきりさせるために、ご免こうむりまして——許しがたい無礼をはたらかせていただきます。多分無礼だと思いにられるでしょう。ヒンドゥー教の思想もギリシアの思想も同じように人間の思考のある必然的な予備的条件——つまり、数と定義と種類と抽象的形式——への客観的な取り扱いに過剰に取りつかれているように思われます。しかし、こうしたもの、数や定義、種類、抽象的形式は精神活動の単なる不可避的条件にすぎないのだと私は思います——本質的な事実ではなく、悲しむべき条件なのです。**私たちの精神のピンセットは扱いにくいピンセットで、真実をとらえる時に少しつぶしてしまうのです。**

プラトンの精神が一生をかけて取り組みながら結論が出なかったのはこの難問についてでした。大体において彼は**イデア（観念）**を実体の背後にある何かとみなす傾向がありました。私には、観念はもっと近くにあり、完全性が少ないものだと思います。それは精神が個々の相違を無視することによって、それ以外のやり方では操作不可能な数の唯一的実体を理解しようとするために用いているものなのです。

これは、一般名辞の哲学的な妥当性に対する最初の攻撃ですが、それによって私が伝えようとしていることの概要を示させてください。皆さんは、四角い網目を使うさまざまな方法での白黒の再現の結果を見たことがあるでしょう。私が言わんとしているような写真製版画像をご存知でしょう——かつては写真の複製に非常によくつかわれていました。遠くからだ元になった絵の忠実な複製があるように見えるのですが、近くでじっと見ると、元の絵にあった一つ一つ異なる形と量感ではなく、形も大きさも一様な無数の小さな四角形なのだ気づきます。それを真剣に調べれば調べるほど、細かく見れば見るほど、絵は網目模様の中に消えて行ってしまいます。理にかなった探究の世界は、私が客観的現実と呼ぶ世界に対してとてもよく似た関係を持っていると思います。日常的な大雑把な目的には、網目の写真で十分でしょうが、目的が細かなもの

になればなるほど役に立たなくなります。そして、理想的なほど繊細な目的のためには、つまり、顕微鏡を持っている人に真実であるのと同じように遠くで望遠鏡を持っている人にも真実であるような絶対的で一般的な知識にとっては、それはまったく役に立たないでしょう。

皆さんが自分の論理的解釈の網の目をもっともっと細かくしていけるということ、分類をより一層精密にしていけるということは本当です——一定の限界までは。しかし、本質的に皆さんは限界の中で作業していて、近づくにつれて、より細かく微妙なものを見るにつれて、またその方法が求める実際的な目的から離れるにつれて、失敗の要因が増加するのです。それぞれの種は曖昧で、それぞれの用語は両端ではぼんやりとしたものになっていきます。そういうわけで、私の考え方では、容赦ない論理とは愚かさに対する——ある種の知的な頑固さに対する——言い換え表現にすぎません。もし皆さんが一連の妥当な演繹法を通して哲学的な、あるいは形而上学的な探究を進めたとして——一般に認められている誤謬をまったく犯すことが無かったとしても——客観的真実の、摩擦による、また周辺の損失がある程度生じてしまいますし、その過程の各々の段階で追跡困難な偏りができてしまうのです。すべての種は、その定義の中で揺れ動き、すべての道具は握り部分が少しゆるくなっており、すべての定規には個々の誤差があります。経験の有限な事物に関する実際的な目的に向かって推論を進めている限りは時々その過程をチェックし、調整を補正することができます。しかし、皆さんが哲学的、神学的探求と呼ばれることを行う時には、またその方法を事物の最終的で絶対的な真実に向けるときには、それができません。そうしようとするのは、距離が分からないところであって、近づくことができず、印をつけることもできず、壊すこともできない標的を欠陥品のライフルと質の信頼できない葉莖を使って撃つようなものです。たとえ偶然に命中したとしても、当たったことがわかりませんし、それ故にまったく問題になりません。

すべての推論的過程は必然的に信頼できないものであるという先ほどの主張は、唯一物からなる宇宙だと十分に想像できるものにおける、この分類の誤謬から生じており、〈思考の道具〉に対する私の全体的な懐疑主義を紹介する特

徴の一つを形成しているにすぎません。

ここで、非実証的な言葉と関係する道具への懐疑主義のもう一つの特徴について話さなければなりません¹⁰⁾。

論理における類^{クラス}は、はっきり定まった限界を持つわけではないのに、硬いしっかりとした輪郭を持つ円で表されますし、それだけではなく、非実証的な言葉を、いつでも、それらが実証的な類を表しているかのように考える傾向があります。ちょうど数や抽象的形式がそうであるように、言葉には人類発達の明確な諸段階があります。ご存知のように、数に関しては、人間がかろうじて数を数えられる段階、言い換えれば、指を使った完全に誠実で健全に数える段階があります。それから、数の発達と苦闘している段階が来ます。この時、数に関するすべての種類の観念を精緻なものにしていきます。その後、ついに、完全数や不完全数とか、3について、7についてなどの複雑な迷信を作り上げていきます¹¹⁾。抽象的な形式についても事情は同じですし、今日でさえ、球体や理想的に完全な形式などに関する思考の広大で微妙な混乱からやっと頭を出したくらいでしかありません。それは明晰な思考へ至るのに必要なこの小さな歩みの代価なのです。数学的、幾何学的魔術や、数学的、幾何学的哲学が精神の歴史においてどれほどに大きな役割を果たしてきたかについて、皆さんは私よりもよくご存知です。そして、言語と精神的伝達の装置全体には同じような危険がちりばめられています。未開人の言語は純粹に実証的だろうと私は思います。つまり、物には名前があり、名前には物があるということです。これははっきり言えば言語の伝統であり、今日でさえ私たちは名前を聞いた時には、直ちにその名前に一致するような何かを想像しがちです——時としてこれは非常に間違った傾向です。**私たちは、治療不可能な精神的悪習として、言葉のうちに緊張を蓄積する傾向があります。**もし私が皆さんに〈Wodget〉とか〈Crump〉と言ったら、皆さんは、こうした語は無であるとか、いわば単なる伏字のようなものであるという事実を見過ごしてしまい、自分が Wodget や Crump がどのような種類のものなのか考えようとしていることに気づくでしょう。そして、この傾向が、最も誘惑的な偽装をつけて生じるのは非実証的な言葉の場合です。私たちの知識の道具は〈絶対〉とか〈無限〉のようにあからさ

まに非実証的な言葉であってさえ、それらが真の实在であるかのように扱うことに固執します。そして、〈全知の〉のような語におけるように、非つ事象の要素がほとんどまったく偽装されていない時には実証的現実という幻想が完全なものになるでしょう。

思い出していただきたいのは、私が皆さんに自分の哲学を語ろうとしているのであって、皆さんの哲学について議論しているのではないということです。私の精神の中でこの非実証的な言葉の問題がどのように形成されてきたのかを説明できるか試させてください。私は、舞台裏でとか法廷外でとか、あるいは〈含意のない空虚〉とか〈無〉とか〈外側の暗黒〉というという言葉で最もうまく言えるかもしれない何かについて考えています。これは人間の思考の目に見える世界に対する一種の仮説的〈彼方^{ビヨンド}〉であり、そこに向かってすべての非実証的な言葉が最後に到達して、合流し、無となるのだと私は考えています。どのような実証的類^{クラス}を作ろうとも、どのような境界線を引こうとも、それと対応する非実証的類が即座にその境界線から始まって、無限の無の地平線までつながっていくのです。皆さんがピンク色のものについて話すと、皆さんが訓練を受けた論理学者であれば、ピンクだとするのがもっと難しい色調を無視して線を引くのです。それを越えたところは、既知の、そして知ることのできる非ピンクですが、それでも非ピンクの領域で〈外部の暗黒〉に入ってきます。青ではない、幸福ではない、鉄ではない、すべての^{ノット・クラス}ではない類がこの〈外部の暗黒〉で出会います。この同じ〈外部の暗黒〉と無は無限の空間で、無限の時間で、無限の性質を持つすべての存在です。その領域全体を私は、私の哲学において、すっかり排除し考慮に入れません。私は、どのような^{ノット・シングス}ではない物についても、避けられるのならば、肯定も否定もしないでしょう。偶然か不注意によるのでなければ、ではない物をまったく取り扱わないでしょう。もし「無限」という言葉を使うのならば、「数えきれないほどの」という語をしばしば使っているのと同じように使うでしょう。「数えきれないほどの敵の軍勢」のように。あるいは、測ることができないほどの高い断崖のように「測ることができないほどの」を使うでしょう。それはつまり、想像上の測定可能性の限界としてよりも、測定の限界としてです。布ヤールをできる限り何倍にもし

て、更に更に何倍にもした長さに対応する便利な等価物としてです¹²⁾。さて、非常に多くの見かけ上は実証的な言葉は、実際には、非実証的な言葉であるか、あるいはそうしたものになっており、私たちは同じ禁止のもとにあります。思想の世界で重要な役割を果たしてきたかなり多くの言葉は、この同じ欠点によって無効にされて、また、まったく内容を持たなくなったか、あるいは不明確な内容や正当化できない内容を持つようになったように思われます。例えば、無限の知識を含意する〈全知〉という語は、実質的で十分なものだという誤解を生じさせる雰囲気を持つ語のように私には感じられますが、実際にはまったく内容のない虚ろなものです。私は以下のことを確信しています。つまり、知るということは、意識を持つ存在がそれ自体ではない何かに持つ関係であること、知られたものは、部分と側面と関係性の体系として定義されること、知識は理解であること、それ故に、有限のものだけが知ることができ、あるいは知られることができるのだということです。皆さんが、無限の延長と無限の持続という存在について、また、全知と全能と〈完全〉について語る時、私には皆さんが全くの無という否定の中で語っているように思われます。皆さんが〈絶対〉について話す時には、私に何も話してはいないのです。ですが、もし皆さんが大いなる、しかし有限で思考可能な存在について、つまり私自身ではなく、時空における私の想像を越えて延長し、私が思いつけるものを既知のものとして知っていて、私が思いつくすべてのことをなしたもものとして行える存在として語っているのなら、皆さんは私の精神的操作の範囲内に、そして私の哲学の体系の中に入ってくるのです。……

そして、次のことが、私たちの〈知識の道具〉に対する私からの最初の二つの告発です。第一には、〈知識の道具〉は個性性を無視し、唯一的なものを、あれこれの面で同一と言えるほど類似したものとして扱うことによるのみ機能し、その結果、そうしたものを一つの言葉にまとめてしまい、そして、一度そうした時には自動的にその言葉の重要性を強調していく傾向を持つということです。第二には、それは、非実証的な言葉を実証的であるかのように扱うことによるのみその非実証的な言葉を自由に扱うことができるということです。しかし、〈人間の思考の道具〉に対して私はさらにもう一つの異議があり

ます。前の二つの異議とは相互関係がありませんし、うまく伝えるのがもっと難しいものです。

本質的には、この考えは、人間の諸観念における一種の階層化を示すものです。私が強く意図しているのは、私たちの理性の様々な用語はいわば様々なレベルに、様々な段階の平面に存在しているということ、そして、私たちは同一の平面にない、あるいはほとんど同一の平面にない用語と一緒にして論じることで大量の過ちや混乱を作り上げているということです。

物理的なものから取り上げる最も途方もない実例を使って、私の考えをもう少しわかりやすくする努力をさせてください。顕微鏡を通して原子を見ている男のことを、あるいはもっと良いのはナイフで原子を二つに切り分けようとしている男のことを、誰かが真面目に話し始めているところを想像してみてください。こんな風にして、原子を目で見ることができるとか、切り分けられると実に簡単に信じてしまえるような非分析的な人たちがたくさんいます。しかし、物理的な概念にもう少し詳しい人なら、原子をナイフで二つに切るくらいなら、いっそカラスを打つ射撃用ライフルで2の平方根を打ち殺すほうがましだと考えることでしょう。私の原子に関する概念は仮説と分析の過程を通して理解されますし、原子の世界にはナイフもないし、切ろうとする人もいません。もし皆さんが強い一貫した精神の動きで考えたとしたら、ナイフの刃を当てた原子を考えた時に、そのナイフの刃自体が、集団となって震える原子の雲となり、顕微鏡のレンズは振動する分子の小さな宇宙となっているでしょう。皆さんが原子のレベルで考えて宇宙について考えるなら、それを切るナイフも、重さをはかるはかりも、それを見る目もありません。**分子物理学者が降り立つ平面では**、宇宙は私たちの日常的な生活での姿形をまったく持っていません。私が字を書いているこの手は、分子物理学者の宇宙では争いあう原子や分子の雲であり、それがエーテルという宇宙的大気の中で結合し、再結合し、衝突し、回転し、あちこち飛び回っているのです¹³⁾。

私が、分子物理学の宇宙は日常的経験の宇宙とは異なるレベルにあるという時、私は皆さんが私の言わんとしている意図を理解してくれるだろうと期待しています——安定していて固いと私たちが言っているものは、その世界では絡

み合う力の中心の自由に動いている体系であり、私たちが色や音と呼んでいるものは様々な長さの振動でしかありません。私たちは組織だった分析という偉大な企てによりこの分子物理学の宇宙の概念に到達しました。そして、私たちの日々の経験の宇宙は、まるでそうした元素的なものの合成であるかのようにして、この元素的世界と関係して存在しているのです。

私が皆さんに伝えたいと思っているのは、これが一般的事態の非常に極端な例にすぎないということ、そして、ある言葉と別の言葉との間にはもっと繊細でもっと微妙な相違のレベルがあるかもしれないということ、その言葉は異なる諸レベルを通して斜めに存在し、捻じれているものとして、とてもうまく考えることができるかもしれないということです。

もし、私が人間の思考と知識の全世界に対して具体的観念を提案したなら、たぶん私が伝えようとしているものについてもっと明確なイメージを与えることができるでしょう。大きな透き通ったゼリーを想像してみてください。そこには、すべての角度で、また単純性やあるいは歪みのすべての状態で、人間の観念が埋め込まれています。そうした観念は、横たわっているときには、すべてが妥当で可能な観念であり、現実では互いに両立することはできません。もし、皆さんが、この透き通ったゼリーの中での上か下への方向がいわば分析によってか、統合によってかで移動する方向だと想像してみるならば、そして、もし皆さんが例えば物質から原子と力の中心へと下って行き、そして、人間や国家へと登っていくならば——もし皆さんが、観念がその様に存在していると想像するならば——私の意図の出発点に届くでしょう。しかし、私たちの〈道具〉、私たちの思考過程は透視図法発見以前のデッサンのように、三次元を表すのに困難があるように思われるでしょうし、諸観念を同じ平面に投影することによってでしか観念を扱ったり、判断したりができないように思われるでしょう。途方もなく大きな数の事物がしっかりとゼリーの中で非常によく共存できることは明白でしょうが、そうした事物は、一つの平面上と一緒に投影された時には、重複したり、両立できなかつたり、相互に破壊的だつたりすることでしょう。これを行う私たちの〈道具〉の中にある偏見^{バイアス}によって、つまり同一平面上にない言葉同士を論じることによって、莫大な量の混乱と当惑と精

神的行き詰まりが生じているのです。

予定説と自由意志の間にある古くからの精神的行き詰まりは、私が言わんとしている種類の行き詰まりの一例としてとてもよく役立つでしょう。共通の感覚と共通の経験のレベルで人生を取り上げてみてください。そうすると、人間の完全に道徳的な責任を除けば、人間の意志の自由以上に議論の余地のない事実はないでしょう。しかし、最小限の分析を行ってみるだけでも、不可避の結果からなる世界、厳密な原因と結果の連続を感じ取ることができるでしょう。両者の正確な一致を主張していけば、ほら、すぐお判りでしょう。〈道具〉はうまく働かないのです。

こうした3点の異議の上に、そして、私の第一と第二の異議から実質的に生じてくる抽象的な言葉への極度の疑いの上に、私は、〈思考の道具〉のとてもありそうもない可能性についての深い懐疑の弁護を主としておいています。それは人間の目や人間の耳と同じように不完全なものです。ただし、他の道具と同様に、より大きな範囲とより大きな力への進化への漠然とした可能性を持っているでしょうが。

私の中心的な主張はここまでにしておきます。しかし、結論を述べる前に、今ここにいるのですから、自伝的な流れで、また、皆さんの議論のためにも、もう少し話してもいいでしょう。そうすれば、私がこの基本的な懐疑主義を、自分が抱える全世界的な諸問題に関する非常に実証的な信念とどのように一致させているか、更には、正しいことと間違ったことの間で私が下す非常に明確な区別とどのように一致させているのかを説明できるかもしれません。

皆さんに単にこう指摘するだけで、私はこれらを一致させるのです。それは、もし私たちの諸観念が保持されている三次元的ゼリーのイメージに何らかの妥当性があるならば、皆さんが論理に求めているような一致、一つの平面上で調和しているような事物の投影は、完全に不必要で不可能になるでしょう。そうしたものは一つの平面上では決して一緒になることができないのです。

存在物における唯一性という要素へのこの強調、この個々の相違への類^{クラス}の従属は、哲学の普遍的な主張を破壊するだけでなく、倫理的責務についての普遍的主張、すべての宗教的教義についての普遍的主張をも破壊します。もしも

皆さんが私を基本的な立場まで押し戻すならば、私はこう告白せざるを得ません。私が信念と基準と行動規範を置いているレベルは、私が自分の信じていることを芸術において正しいもの、そして芸術において正しい実践と私が考えるものに置いているのとまったく同一のレベルなのです。私はある種の自己認識に到達し、そこに私にとって非常にはっきりした責務があるということを見出しました。ですが、それが他のすべての人にとっても責務であると証明することはできないと認めようという覚悟はしっかりできています。ある人の政治的な行為、ある人の道徳上の行為は、その人の詩や絵画、音楽と同じ位に自己表現なのだとは私は考えます。しかし、人生はその根源的な要素に対して同意したり攻撃したりするので、私は自分の責務に従うだけでなく、説得力を持って、また納得してもらえるようにして、それを他の人の精神に委ねて、そして、**私の善と私の悪**がものを考えようとしない人の信じる普遍的〈善〉と普遍的〈悪〉であるかのように、**私の善**を生じさせ、**私の悪**に抵抗し打ち勝つようにしようとしているのです。そして、この哲学と決して矛盾しないのは明らかかなことがあります。それは、もし他の人たちが私の述べていること全てに共感を持って反応してくれていることに私が気付いたり、あるいは私の周囲で述べられていることに私自身が共感を持って反応していることに私が気付いたりしたなら、私はこうした他の人達と自分自身の間にある共通の類似に名前を与え、また、それがいわば外在化され、私たち全員を取り巻くものであるかのように、他の人たちと私自身を共にこのものに帰属させるということです。

〈道具についての懷疑主義〉は例えば宗教的連想や、共通の信仰を基盤とする組織と両立不可能なものではありません。〈神〉を、人間と社会との関係において統合的な〈存在〉としてみなすことは可能です。丁度、原子と分子と無機的な関係の宇宙という観念が人間の生活との関係において分析的であるようにです。

この〈道具についての懷疑主義〉である直接的で立証可能なものを除くすべてにおける論証の拒絶、つまり道徳的および宗教的命題を支持する普遍的妥当性をすべて放棄すること、これは、倫理的、社会的、宗教的教養を詩の領域に運び込み、今日の大きな精神的存在の特徴となっている知識と美の乖離を修正

することに役立っています。こうしたことすべては自己表現です。こうした見解は私たちが洞察と呼んでいる精神の性質に、新しい、より大きな価値を置きます。この洞察は物事を見通し、光を当てるものであり、精神の道具の不完全性から生じる諸矛盾に向かう時にはユーモアと呼ばれているものです。こうした生得的で、教え込むことのできない性質の中に——ユーモアと美的感覚の中に——私たちの知的な道具の持つ現在からの知的救済の希望が存在するのだと私は考えます。それは、この特殊な様相をした、不確実で変動的な世界で私たちが抱いていくことのできる希望です。

私は自分の基本的な諸仮説についてのささやかな知識を皆さんの前に率直に広げました。これを取り上げ、聞き手がいることで確かなものとなる詳細な検討を行い、皆さんがそこから感じた印象を聞くというこの機会を与えてくださったことを心から嬉しく思います。もちろんこのような素描^{スケッチ}には、行うにあたって避けがたい粗雑さがあるに間違いありません。私に与えられた時間——つまり準備に費やせた時間ですが——は、説明を徹底したものに仕上げるにはあまりに限られたものでした。しかし、全体としては、私の精神的基盤に関するこの素描的地図の主要な線を確認なものにできたと考えています。私自身を理解していただけるようにできたかどうかは、まったく別の問題です。私ではなく、皆さんこそが、私のこの素描的地図が、皆さん自身のもっと体系的な地図作成との関係においてどのように存在しているかを述べていくのです。

注

○原文中のイタリック体部分は太いゴシック体で表した。

- 1) センテンス最後のピリオドの後に、スペースを入れながらピリオドを3回打つのはウェルズ独特の表記法である。省略を示す *ellipsis dots* と同じ形であるが、省略ではなく、やや長い休止のように思われる。この訳ではこのように「ません。……」と表記した。
- 2) 客観的な存在 *objective being* 以下にあるように「主観的」「内省的」に対立するので「客観的」としたが、次の〈実証主義者〉と併せて考えると、具体的、具象的な思考をする存在を指すと思われる。
- 3) 〈実証主義者〉 *Positivist* 実証主義 *Positivism* は、オーギュスト・コントにより体系

化された哲学で、「経験的事実のみに立脚し、先験のないし形而上学的な推論を一切排除する哲学の立場（ブリタニカ国際大百科事典）」である。

- 4) ウェルズは1866年、ロンドン郊外ブルムリーの下層中流階級に生まれた。7歳から13歳まで近隣の Bromley Academy という商業学校に通い、14歳から奉公に出て、服地商の住込み店員となった。その後、紆余曲折を経て、グラマー・スクール補助教員となり、1884年に奨学金を得てロンドンの科学師範学校 Normal School of Science に入学した。
- 5) *Popular Educator* イギリスの出版業者ジョン・キャッセルが1852年から出版した週刊の科学啓蒙の雑誌百科。歴史、科学、外国語などの独習を勧めた。
- 6) ウェルズは奨学金を得て、1884年から3年間、ロンドンの同地にあった科学師範学校に学んだが、最終的に学位は得られなかった。トマス・ヘンリー・ハックスリー (1825-95) は当時の著名な生物学者・博物学者で、ダーウィンの進化論の擁護者としても知られていた。ウェルズは彼を信奉し、その影響は初期のSF的作品を中心に強く表れている。
- 7) *Fortnightly Review* イギリスの隔週刊評論雑誌。1865年創刊。
- 8) ジョン・ウェズリー・ジャッド (1840-1916) イギリスの地質学者。ウェルズは師範学校最後の年 (1886-7) に彼のもとで学んでいる。『自伝の試み』によるとジャッドは学生を過度に管理したがるタイプの教師でウェルズはあまり好感を持てなかった (187-188頁)。マッケンジー夫妻の『時の旅人』によると「機械的な丸暗記を要求するジャッド教授のもとで、おごりなりやり方で地質学を勉強した」とある (邦訳、113頁)。
- 9) 読書用椅子 reading-chair 後ろ向きにまたがって座る椅子で、背に傾斜した本置台がついている。セティー settee 背と肘掛付きの長いす、中型のソファ。オペラ・ストール opera stalls 劇場1階正面の一等席。
- 10) 非実証的な言葉 negative terms 以下の説明に合わせて、positive を「実証的な」、negative を「非実証的な」と訳す。
- 11) 完全数 perfect number それ自身を除く約数の総和がそれ自身に等しいような自然数。例えば、 $6=1+2+3$ 。
- 12) 布ヤール cloth yard 布地の計測単位。かつては37インチ (93cm) だったが、現在は36インチ (3フィート=91cm)。
- 13) エーテル 古代ギリシア以来全宇宙を満たすとされた仮想的物質で、光や電磁場の媒質とされていた。1881年にマイケルソン＝モーリーの実験により存在が否定された。ウェルズがここで実際にエーテルの存在を信じているのかははっきりしない。『透明人間』*The Invisible Man* (1897) には物を透明にするときに「エーテル波動」を

使うという記述がある。

解説

この講演は、H. G. Wells (1866–1946) の“Scepticism of Instrument”の全訳である。底本には、この論文を付録としてつけている *A Modern Utopia* (1905) の Penguin Books 版 (eds. Gregory Claeys & Patrick Parrinder, 2005.) を使用した。

初版である Chapman & Hall 社版 (1905) では、タイトルの次に *A Modern Utopia* の第1章第6節、第10章第1節、第2節を参照と付記されている。前者は、種族 race とは均質なものではなく、ユニークな個人の集合であることを強調し、後者は「ユートピアにおける種族」と題され、人間の諸種族とは間違った観念であると述べ、人類を諸種族に分ける誤謬が批判されている。

本論は題名通り私たちが思考する際に用いる道具の信頼性への疑念を表している。まず個体と類の関係が取り上げられる。こうした考えは、古来、唯名論と実念論の対立としてなされていたが、ウェルズは生物学・分類学の視点から個体の唯一性を重視し、種概念の不確かさを論じている。ついで彼は類概念がその構成要素の個別性を均質化したり、個々の特徴を削ってしまうことを述べ、また非実証的内容を持つ名詞があたかも実証的なもののように取り扱われがちに注意を向けさせる。さらに、観念の階層化への無理解が異なる平面上の観念を結び付けていることの危険性が示される。

この講演を付録とする *A Modern Utopia* ではまず構成員の自由が最も重要なものとされ、また人種や国家というものが無い、人類の世界国家が目指されている。そしてそれを可能にするのが理性である。個人の自由と国家の効率的運営との関係などについてこの作品自体には問題とすべき点もあるが、ウェルズとしてはこの講演が *A Modern Utopia* のいわば理論的基盤を示すに有用と考えていたのである。